１６歳を考える 思春期を考える

～高専１年生のグループワークにみる事例報告～

武田誠司・宮沢幸・鬼塚政一[1]・友安一夫・鈴木美保子[2]

What 16-Year-Olds are Thinking and Feeling:
The Case Study on Group Work for First-Year Students at National College of Technology

Seiji TAKEDA, Sachi MIYAZAWA, Masakazu ONIZUKA, Kazuo TOMOYASU
and Mihoko SUZUKI

(Accepted September 24, 2012)

Abstract　As homeroom teachers for first-year students at national college of technology (kosen), we felt that some of our students were having problematic behaviors, struggling to keep up with study, or adapting themselves to school life. Thus, we decided to have group work with help of our school counselor to tackle these problems. First, we read a picture book to the students to stimulate them to express their inner selves and help them communicate with others. Second, the counselor gave a talk on adolescence and sex to help the students to accept themselves as they were. And third, the students had a group discussion to introduce one another so that they could acknowledge the differences among individuals and the need to cooperate with one another. Through group work, we learn that it is very important for kosen students to have comradeship and be accepted by their fellows. Also, we suggest group work as an educational program for kosen students.

Keywords　［A picture book, Comradeship, Training in young people, Educational program, Human education ］

１　目的

思春期にある中学生が高専に入学して、工学の専門教育を受けながら５年間を過ごしている。我々は高専１年生のクラス担任教員として学生に接する中で、いくつかの疑問を持った。どうして宿題ができないのだろう。どうして勉強しないのだろう。どうして無断欠席・早退するのだろう。どうしてルールを守れないのだろう。これらの問題・疑問が発生する根本の原因として、学生の幼さを感じた我々は、本校カウンセラーの協力のもと、グループワークを特別活動の時間に実施した。

グループワークとは、正式にはソーシャル・グループ・ワーク（social group work）といい、グループでのプログラム活動に参加することで、メンバー相互が影響を受け、個人の成長・発達を目指すという援助のことである。

本報告は、実際に行なったグループワークの事例を検証し、思春期後期にある高専１年生の学生の心的内面を刺激し、成長と自立を促す方法としてのグ

１岡山理科大学理学部応用数学科　Department of Applied Mathmatics, Okayama University of Science
２前都城高専スクールカウンセラー　The Former School Counsellor of Miyakonojo National College of Technology

ループワークの確立をめざし、高専の低学年における人間教育の基盤となる教育プログラムの検討を行なうことを目的とした。

2　方法

2．1　対象

都城高専 1 年生の学生に対して、4 つのクラス毎に実施した。各クラスの人員は、40 名程度だった。

2．2　実施期間

9 月の末から 2 月初旬までの期間に、特別活動等の時間を利用して 1 クラスあたり 3 回を標準とするグループワークを 4 クラスのうちの 3 クラスが行なった。

2．3　1回目のグループワーク

1 回目のグループワークは、2 時間の時間設定とした。教室を移動して、集会施設のカーペット敷の大広間に集合した後、学生を自由に着座させた。最初に支援者の紹介をした後、グループワークの説明をした。「リラックスした姿勢・気持ちで話を聞いて良い。」,「視線は発表者の方に向けてほしい。」,「おしゃべりなど、他の作業をしないようにしてもらいたい。」,「不愉快なことがあっても暴力は振るわない。」という旨の最低限の約束事を学生に指示した。教材は、「アオさんとリンゴ」（1979 年：婦人之友社）馬場のぼる著[注1)]の絵本を用いて、紙芝居として作成した絵を見せながら読み聞かせを行なった。

読み聞かせが終了した後に、10 名のグループに分かれ、円座でグループワークを行なった。グループ分けは 4 人ずつのジャンケンの順番で分かれるように指示し、ランダムなグループ編成とした。各グループには教員が支援者として配置され、学生の記録係を 1 名決定した。グループ内の進行は、「アオさんとリンゴ」について話合うこととし、その他は支援者の裁量に任せた。

「どの登場人物が好きか？その理由は？」などの支援者の質問に対して、学生が一人ずつ意見を出すようにした。最後に各グループの記録係が、グループ内で出た意見をクラス全体に紹介した。

2．4　2回目のグループワーク

本校カウンセラーの鈴木美保子（以下：鈴木と略す。）を講師として「思春期と性について」をテーマに講演を行った。

「赤ちゃんは親を選んで生まれてくる、あなたを選んで生まれてきました。」という内容の絵本[注2)]を用いて、自らの生について、考える刺激を与えた。講演終了後に 10 分程度の時間を設定して、自由記入形式のアンケートを行った。質問は、「話を聞いて感じたこと、思ったこと。」「質問したいこと、わかりたい（知りたい）こと。」「その他、感想・言いたいことを書いてください。」の 3 項目だった。

回収したアンケートの回答からいくつかの質問・意見をピックアップし、カウンセラーの鈴木が手紙形式の文書で回答し、それを後日、対象学生に配付した。

2．5　3回目のグループワーク

集会施設のカーペット敷の大広間にクラス全員を集合させた。自由に着座させ、20 人程度の 2 グループを作った。学生の進行係と記録係を各 1 名選出させ、円座で向かい合い、「5 年間の仲間たちとの異質の協力」を認識し話合うことを行った。導入として 1 名ずつ改めての自己紹介を行った。自己紹介の際には、4 月からの学校生活で感じたこと、印象に残っていることをその人なりの言葉で発表することをルールとした。

3　グループワークの結果と考察

3．1　クラス1のケース

3．1．1　1回目のグループワーク

1 回目のグループワークは、「異質の協力」の体験学習という位置づけだった。異質（様々な人，様々な登場動物）と出会うこと。異質の協力を感じ、それに気づくこと。体験として異質（いろいろな人がいること）を知る。以上のことを目的として行われた。

導入部分である「アオさんとリンゴ」の絵本の読み聞かせは、学生本人の情緒への問いかけをし、内面に疼くものを感じさせることを期待しておこなわれた。絵本を見終わった後のグループワークは、個々人の心のうちに湧いたであろう“疼き”を“感じたこと”“思ったこと”として表現していくプロセス、つまり、自己内面を表明し、他の人に伝える能力を支援・刺激することを目的とした。このときの支援者の心得としては、“ひとりひとり”という“個別性”への尊重ということへ最大限の配慮をして話し合いを進めるとこととした。具体的には、まず最初に支援者の自己紹介（自己表明）として、絵本を見て感じたこと思ったことを話した。その後「皆さんはどうでしたか？」と思いを分かち合って行くように導いた。その中で発言された意見を表 1 に示した。

表１．　登場動物に対して感じたことの例

登場動物	発言された意見
アオさん（ウマ）	・アオさんは優しい。・アオさんと自分が似ている。 ・アオさんは人が良くてかわいそうだった。 ・アオさんまぬけ。食える時にリンゴを食べれば良かった。
ネコ	・ネコは賢かった。・ネコさんっぽくなりたい。 ・ネコやらしい。・ネコの優しさもあった。 ・ネコは自己中心的だ。
タヌキ	・タヌキのような存在の人はいてはならない。 ・タヌキはやっぱりケチ。・タヌキは，根は良い。 ・タヌキは冷たい。
ゴリラ	・ゴリラの気持ちがよくわからない？ ・ゴリラと友達になりたくない。 ・ゴリラが全部リンゴを食べちゃった。
リス	・リスは最低だな。・リスは無責任だ。 ・リスはお調子者だ。
カラス	・カラスはイケテルね。

さらに、自分自身が絵本の登場キャラクター、例えばアオさんだったらどうしていたか等の問いかけに対して、感じたことを発表していった。その中で、1つのグループは「みんなと意見交換して、アオさんの優しさがわかった。」と思いを共有し、「頼まれたら断らないようにしたい。」「嫌なことをされても怒らないようにする。」「優しく接したい。心を広くしたい。」などと自らの行動を見直す展開に発展していった。

最後にまとめとして、本校カウンセラーの鈴木の講話を行なった。「今、わたしは 16 歳。思春期である。」,「思春期の成長を体感しよう！」,「成長は“話す、表明する”ことで姿が生まれる。その人の奥に！」,「自分を知っていますか？何と戦っていますか？どこへ向かおうとしていますか？」,「情緒がわたしを育てる。」「ひとりひとりの“ちがい”に気づくと、“ちがい”の中に“わたし”が感じられてくる。」,「異質の協力が生起する。」,「わたしを大切にしましょう。まかされきっている“わたし”を知るところまで。」などのメッセージが伝えられた。

３．１．２　クラス１の２回目のグループワーク

本校カウンセラーの鈴木を講師として、講演形式の授業を行った。講演では、異質（個別性）の本質を知ることを目的とし、“わたしはわたし”ということを引き受ける支援を目指して行われた。「わたしがあなたを選びました」（2001 年：鮫島浩二著，植野ゆかりイラスト，主婦の友社）の絵本を資料として、“性”についての話をした。「わたし（赤ちゃん）が、あなた（両親）をえらびました。」というメッセージを中心として、男性性と女性性から生まれるもの。「今“性”が大きく目覚めようとしている。」という思春期の内面と感情に呼びかける話をした。

講演終了後に、今日聞いた話から何を感じどんな思いが湧いたかを知る為にアンケートを行なった。そして、アンケートの回答から鈴木がいくつかの質問をピックアップし、思い・感じたことを分かちあうために手紙形式で回答した。その手紙は、各学生に配付し読ませた。以下にその手紙を示した。

資料１．　カウンセラー鈴木の手紙

高専○○クラスの＜質問したいこと、わかりたいこと（知りたい）こと＞アンケートから
平成 23 年 11 月 9 日
・子どもって本当に親を選んでいるんですか？よく、子は親を選べないということを耳にしますが、なぜ子どもは親を選んでいるという確信があるのか、私にはわかりませんが、これから生きてゆく上でわかればいいなと思います。
・赤ちゃんは両親を選ぶ時、どういうところでこの両親はちゃんとしているみたいなことが分かるのですか？
・親を選んだとしたら，なぜ虐待をされたり，自殺をしてしまうのか。
・人生とはなんなのか。
・未来や前世は本当にあると思うか。
・人間は生きていく中でもっとも物事の吸収が早い時期が分かりたい。
・自分は生まれてかくせい（覚醒）するとき、どう成長したのか知りたい。
・自分のテーマをはっきり自覚するにはどうするのが一番いいのか？が知りたいです。
・ 今の時期にはやることが多すぎて大変です。休養もとりたいのですが時間がありません。どうすればいいでしょうか。
平成 23 年 11 月 10 日　午後１時
昨日の皆さんの感想文を念入りに読んでいました。そうして質問②の「質問したいこと、わかりたいこと」の欄に記入してくださった方々へご返事を書いてみようかなと思い立って机に向かっています。
まず、とてもうれしかったのは若い皆さんが“やはり！そうだった”と思ったのですが、こんな話をきちんと聞こうとしてくださったこと、全員の文を読んで安心というか、心を動かされました。＜ほん

とうに！嬉しかった。良い人生にしていこうね！皆さん。＞

親を選んでやってくる赤ん坊のことですが、研究としてはあるお医者さんが言っていることがあります。＜お母さんのお腹にやってくる前後のことを覚えていてお話をしてしまっているという子どもたちの現状を日本中を探しながらデータにしている方がいます。３歳くらいまでは状況が良ければお話ししているようです。＞このお話をしてしまう、という人間のことが理解できますか？私たちも何故あんなことを私は言ったんだろう！と、ふと頭を傾げるようなことが起きていますよね。小さな子どもたちはまだ社会性に乏しく、思い込みがなく純粋なのでお母さんの質問におままごとのようなそぶりで「そうだよ！お母さんをお空からみていたの！お父さんもいたの！」という風に何気もなく表現してしまうようです。聞き上手なお母さんによって聞かれていることが多いようです。

私の体験としては＜抱っこ法＞というある意味＜技法＞があって、しかしこれは単なる技法だとは思っていませんが、とても苦しんでいる赤ん坊（生後２カ月の赤ん坊たちから、抱っこをさせてもらってお話を聞いていますが、家族と赤ん坊との対話を仲介すると言うカウンセリングだと思っています。）のリアリティに触れて行くと、どうしても今生だけの出来事というだけでは納得できない状況がたくさん生まれてしまうのです。赤ん坊の気持ちに触れるような会話になると家族皆が心打たれて涙する状況にもたくさん出会ってきました。不思議だなー、と私もただ感動しているのですが、ともかくあくせくと忙しい毎日に思えていながら実は皆奥深くすばらしい輝きへ向かって息づいているのだと思わされる体験がたくさんあります。だから 70 歳を過ぎてもカウンセラーという仕事に、つい夢中になるのでしょう。

親を選ぶとき、どういうところで選ぶのか？

とても深いところからの疑問で、答えるのに難しいのですが、例えば私のことなのですが、いろんな心理技法などなど精神技法も加えて、そして、自分の生い立ちをさかのぼってみました。

明らかに両親と兄弟達から「この子はいらない！要らなかったのに！」と誕生直後から疎外されてきていました。何故そうなっていたのかも、50 歳を過ぎてからほぼ明確にできたのですが、小さい頃から私を必要としてくれる人を探して、愛されたい、愛することを許されたい、とそんな望みを持って生きてきたようです。そうやっているうちに「カウンセリング」と出会い、研修を重ねながら、最終的には、つまり最近ですがとても満足しています。「愛」を見つけたからです。グループワーク、異質の協力もみんなの中心に共に居るよね！ということへの誠意が目覚めるところから、愛情は目に見えないのですが根を育てていることが確信できます。そんな訳で私はこの私を必要と抱きしめなかった両親が必要だったようです。おかげさまで 71 歳の鈴木は思春期に居る皆さんが大好きです。自分のことでは、すでになんの力もなくなっていて、なのに、戴いているものの大きさも解ってきました。多分毎日出会う皆さんから戴いているのでしょう。

虐待の問題、自殺の問題、私はお母さんの苦悩の大きなこの時代を思うとき、心が痛むのですが、実は胎内から赤ん坊達はお母さんと命を＜共に＞しているということで誰にも知られず、虐待され続けている場合がありそうだと思っています。母体にとって幸せな環境、時代を創造できたらなーと無力さを嘆いてもきました。だから＜人生の始まりは思春期！＞といろんなところでお話もしてきています。自覚して人生を始めるとき、皆さんは自分の人生を「幸い」なものにできるエネルギーを今造成中なので…。なにか疼いていたら疼きを表明してみませんか。お役に立てたらと思います。カウンセリングルームに来てください。

人生とはなんなのか。未来や前世は本当にあるのか。問い続けたい、折々に問わずに居られない疑問のようです。

物事の吸収が早い時期、これは皆さんの時期なのです。すばらしい能力が開発される時期。そのためには「気掛かりをひとつずつ消化して明らかな自分でいられること」かな？気掛かりをカウンセラーは聞きながら、一緒に考えることをしています。

生まれて覚醒するときどう成長したか、生まれて直後はこの空気にはじめて触れるわけですからその振動、音、温度、匂いなどなどすばらしい感覚への刺激となるようですよ、この世で生きてゆく為に呼吸も始めるわけです。その後お母さんといろんなお世話をもらいながら「感じ」て何かを身につけてゆくようですから、お母さんに赤ん坊だった自分、そのあとお母さんの身の上に何が起きたか、自分はその時どうやっていたか、お父さんは？兄弟達は？いろんな話が聞けるといいですね。お母さんの不幸を子ども達は、知らず知らず、最も深いところで悲しんでいるようです。命を共有していたからでしょうか。悲しみが深すぎて怒りに変わっていることもあります。思春期“自分”に目覚めるとき、お母さんから離れる為にかな？反抗という怒りになって表出されてくることもよくあります。難しいのです

が、虐待という現象。このどうにも離れられない離せない、母と子の「ひとつという」感覚が間違うと虐待の方向へ向いてしまうこともあるのでは？と思えたりしています。良い自立へ意識が向かえたらいいですね。人生って“辛い面”も沢山ありますね。

自分のテーマ、それから忙しすぎるということ「選べる人間に育つ努力」が必要なのかな？自分は今何をしたいと思っているのか？に気付けますか。例えば、眠たいと言うこと。声を出して独り言、「眠たい！」と言ってみると「ちょっとだけ眠ろうかな？」となるのか、「イヤ、あれからしておこう。」となるのか、自分の欲求の度合が解るようになると、それを受け入れることが上手になると、気分が変わるようです。そこから何かが始まりそう！

以上、答え（正解とかいうような）ではありません。私なりに皆さんの気持ちに添うという努力をしながら「応えて」みました。

カウンセラー　　鈴木　美保子

３．１．３　クラス１の３回目のグループワーク

3回目のグループワークは、「5年間の仲間達との異質の協力」を認識し合うことを目的として、改めて自己紹介を行なった。進行役は学生が行ない、支援者も学生と同じ立場で自己紹介を行なった。

円座になって一人ずつ、今までの高専の生活を振り返りながら、自己紹介が行なわれた。うまく自己表明できない、言葉で伝えることができない学生が存在したが、多くの学生は、「5年間一緒に生活しよう」という旨の前向きの言葉が発せられた。入学当初から3年生で進路変更することを言っていた女子学生が、「5 年間勉強して卒業したい。」とはっきり発言したことは印象的だった。

最後のまとめとして、担任教員の気持ち「しっかり勉強して、進級・卒業しよう。」「自分の人生を良いものにしていこう。」という旨の話をして、グループワークの授業を終了した。

３．１．４　クラス１の支援者の感想

クラス1は、入学当初から学業成績が低迷していた。7 月には人の容姿や体型を心ない言葉で指摘する単純ないじめも確認されていた。さらに、文化祭の演し物の準備が学生の無責任な作業状況から計画通りに進まないという問題を抱えていた。

グループーワークをした後に、文化祭の準備に今まで非協力的だった学生が、突然アイディアを提案し、演し物の映像作品を完成させた。また、今まで他人に対して意思疎通ができなかった学生が、少し感情を表出するようになり、言葉も発するようになった。クラスの仲間に受け入れられていることに対して、彼らなりの対応が現れたものと受け止めている。単純ないじめも次第になくなった。それぞれの学生が、グループワーク中の活動から何らかの刺激を受けたものと担任は考えている。

結果として、文化祭での演し物は、それなりの達成感がある出来映えとなり、学生自身の自信を芽生えさせる体験となった。グループワークにおいて、“異質の協力”を意識させたことが、そのとき行なっていた文化祭のグループでの演し物作成の活動に直結して、クラスの仲間という意識はさらに醸成された。その後の学習状況やクラス活動に良い影響を及ぼしたと感じた。

そして、クラス1には今までの生活の中で厳しい生い立ちを背負った学生がいた。学生自らが鈴木先生にあてたアンケートの中で、その心的内面を表出できたことは、その学生にとって、貴重・有益な経験であったと感じた。いくぶん、その学生の人当たりや行動が柔らかくなったと感じた。

３．２　クラス２のケース

クラス 2 は、1 回目のグループワークをクラス 1 と同様の方法で行なった。各グループでの発表の後、カウンセラーの鈴木より、「アオさんとリンゴ」に登場するキャラクター（動物）は，それぞれが伸び伸びとしていて誰も困っていないと告げられた。各学生は、驚きの表情を見せ、「確かに…，誰も損していないなあ。」と感じていたようだった。「アオさんとリンゴ」のキャラクターに自分や友人を重ねていた学生が何人かいた。最後に、「コブタの気持ちもわかってよ」[注3)]（2002 年：小泉吉弘著,幻冬舎）の絵本を読み聞かせ、思春期まっただ中の学生の気持ちを物語によって表現した。

2 回目のグループワークでは、終了後に学生に書いてもらった感想の中から学生それぞれの“思い”が込められた言葉を抜き出し、6 つのグループに分類した資料（資料 2）を作成した。3 回目のグループワークでは、7 名のグループを作り、各グループに資料を配付したうえで“思い”の言葉を分類したグループのタイトルについて、話合いながら、各個人で決定してもらう作業を行った。付けたタイトルは、以下の通りである。

［Ⅰ］のグループ：「食い違い」，「分からなかった人の感想」，「疑問」，「分かってない話」，「〇〇な話」，「？（クエスチョンマーク）」，「理解できなかった」

［Ⅱ］のグループ：「現状と重ねて」，「思春期（成長，変化，自分）」，「思春期ーver.壊れかけの Radioー」，「思春期な話（成長，変化，自己実現）」，「growth

成長」,「ただ今成長中」,「成長（成長に関して，変化について，自分自身)」

［Ⅲ］のグループ:「前進」,「経験（将来)」,「感想（深い感想)」,「十人十色」

［Ⅳ］のグループ:「生命の神秘」,「親子（お母さん，赤ちゃん，子どもを持つ親)」,「母と子（赤ちゃんの神秘)」,「親子（母親，赤ちゃんの感情（初体験)，子どもを思う将来)」,「成長こそ親孝行」,「偉大なる親，！（エクスクラメーションマーク)，決まっていない」,「親と子に関して，赤ちゃんに対して，親になった時の気持ち」

［Ⅴ］のグループ:「感心」,「生前」,「深く考えている（脳，謎)」,「赤ちゃん」,「好奇心」,「疑問（生まれる前のことについて)」

［Ⅵ］のグループ:「先生はスゲー」,「感謝」,「ためになる話」,「想（感謝)」,「thank you Ms. Suzuki」,「感謝」,「先生に対する気持ち（感謝)」

３．２．１　クラス２の支援者の感想

クラス２は、9 月頃にクラス担任が、学級運営をする際にクラス学生のそれぞれの意識が別の方向を向いているように感じた。「クラスとしてのまとまりがなく、浮ついた雰囲気があった。」と振り返っている。2 名の学生が休学や退学を視野に入れた相談を持ちかけ、さらに１名の学生が進路変更を申し出ていた。いずれのケースも保護者と本人に本校カウンセリングルームでのカウンセリングを受診してもらった。以上のような状況の中で、グループワークを実施した。

1 回目のグループワークの感想として、クラス担任は以下のように感じた。他人の意見を聞くことや自分の意見を話すことで、自分とは違ういろいろな人間が身近に存在し協力し合っていることに気づけた学生が幾人かいたようだ。今回のグループワークを通じて、これまで話したことのなかった学生同士が話しをする機会にもなった。他人を知るためのヒントを与えることができたようにも思える。

グループワークを終えた直後は、クラスとして少し落ち着いていたように思えたが、その後、自分の内面に溜まった思春期のエネルギーを抑えきれず、退学を申し出てくる学生もいた。その学生は、夏休み明け直後に学校を退学したいと相談に来た学生で、自分の意志で高専に入学した訳ではないというのが理由であった。実はグループワークの翌日、この学生を含む２名は重大な問題行動を行っていた。約１ヶ月後にこれが明らかとなる。

たった１度のグループワークであったが、学生の内面への響き方も人それぞれであり、各学生に何かしらの変化が生まれていることに気づいた。文化祭演し物の練習では、少しずつ学生同士が歩み寄り、最終的には助け合い支え合う形で本番を迎えることが出来た。これまで他人に見向きもしなかった学生が、少し練習が遅れている学生に、根気よく教えている姿に感動した。クラスの団結力が強まったと感じた瞬間であった。

2 回目のグループワークの「わたしがあなたを選びました」については、性教育的な要素もあり繊細な内容なところもあるので、男性の学生の中には、「分からなかった」、「分かりづらかった」との意見もあった。しかしながら、大半の学生は「思春期」、「成長」、「親子」等のキーワードを読み取り、自分自身と向き合うきっかけ作りになったように思う。特に女性の学生には感じるところがあったようで、母親と子供の関係に興味津々だった。ひとりひとりの個性の素晴らしさに気づいてもらえたのではないだろうか。

3 回目のグループワークは、第 1 回目のグループワークに比べ格段に役割分担（議長、発表者の決定）が早くなったことに気づいた。また、今回のグループワークでは

- クラス全員の意見を知ることが出来る。
- 自分と他人の考え方の違いを知る。
- 同じ内容で同じように表題を付けるが、班ごとに違う工夫がなされていることへの気づきがある。

以上３つの狙いがあったが、大いにその目的は達成できたと思う。自分の意見を言うためにはまず他人の意見を聞けなくてはいけないという、当たり前のことではあるが、これまでできていなかったことが少しずつできるようになってきた。今回は、これまでの２回のグループワークで体験・身に着けてきたことを、しっかりと確認することができたという意味でも大きな成果を挙げたと考える。

３．３　クラス３のケース

クラス３は、1 回目のグループワークを担任教員自らが行なった後、2 回目のグループワークでカウンセラーの鈴木が「あなたを選んで生まれてきました」の絵本を使った講演を行った。講演終了後に、自由記述式の感想文を書いてもらった。以下に印象的な文章を抜粋した。

＊　自分の考えと真逆だったので、少し聞きにくかった。

＊　子が親を選ぶというのは、科学的じゃないと思った。

＊　声が小さくてあまり聞き取れなかった。話が上手ではなかった。

＊　これから自分が大人になるという自覚が全くないので、読み聞かせの内容がよく分からなかった。ただお父さんとお母さんはとても大切だなと思った。
＊　何を言っているのかよくわからなかった。子供が親を選んだという話があったけどそんなことはないと思う。自分が今の親のもとに生まれたのは運命だと思うのでその後の話を信じることができなかった。
＊　話の内容が難しくてあまり分からなかったが、これからのためになる話だったなあと思った。
＊　僕は先生のお話はとても難しく、よく分からなかったことが多かったです。しかし、この時間はためになったと思います。忙しいところ、僕たちのためにお話をしていただきありがとうございました。
＊　自分はあまり理解することはできませんでした、でも今思春期なので、人生の悩みも多くなると思います。そのときは、どのように解決できるか考えていきたいです。
＊　難しすぎるところもあって良く分からなかったけど、哲学的な話もあって楽しかったです。
＊　自分が生まれてきた理由を考えたり、親にこれから感謝していかないといけないなと思いました。

３．３．１　クラス３の支援者の感想

クラス３は、入学当初から、まとまりのあるクラスで、何事にも真面目に取り組むとても良い雰囲気のクラスだった。そんな中、担任がクラス１と２の 1 回目のグループワークに参加し、自分のクラスでもお互いに意見を表現できる場を設けたいと考え、実施することになった。

1 回目のグループワークでは、子供向けの絵本の読み聞かせをするため、学生たちの反応が気になった。しかし、担任が絵本を読み始めると、皆色んな反応を示しながら、真剣に聞き、とても興味を持っている様子であった。その後のグループごとでの話し合いでは、誰が発表するかで口論になったグループもあったが、全体的には、いつもの和気あいあいとした楽しい雰囲気で意見交換会ができた。このクラスでは、終了後すぐには、学生たちの態度に大きな変化は見られなかった。

2 回目のグループワークで、カウンセラーの鈴木から「赤ちゃんは親を選んで生まれてくる」という講話をして頂いた後に、今まで担任が気づかなかった学生たちの一面が見え始めた。学生に書かせた感想文を読んで驚いたのは、鈴木に対してとても厳しい、または無礼なコメントを書いた学生が複数いたことである。担任に対する態度とのあまりの違いに困惑し、カウンセラーの鈴木に相談したところ、「今まで担任とクラスの学生たちの間で良い関係を築いてきたところに、突然部外者である鈴木が入って来たので、裏切られた、という気持ちになったのだろう。」という答えだった。１回目のグループワークをする際に、この一連の活動の中にいるカウンセラーの存在をクラスの学生たちに伝えなかったことも原因かもしれない。

また、この講話を聴いた後、複雑な家庭環境にいた一人の学生が精神的に不安定となり、不登校になった。その後、カウンセリングを通し、その学生と保護者が抱えている大きな問題に直面することとなった。このときの彼の心身的状態を、カウンセラーの鈴木は次のように説明された。「ひと月位の間に思春期の目覚め（彼の場合、自分の悩みの現実が浮き彫りになるという体験）を劇的に体験し、全人格を含んだ心身の機能が停滞するという睡眠状態に襲われていて、精神的には不安状況に居たようです。きっかけはカウンセラー鈴木の思春期の特徴に類する講話を聴いたことです。」その後、カウンセリングや家族での話し合いが行われ、この学生は進路変更のため、自主退学した。

このクラス３の結果を聞くと、グループワークを否定的に考える人も中にはいるかもしれない。しかし、今回の講話がなければ、この学生はさらに悩み苦しみ、またその対応の仕方もさらに難しくなっていたであろう。今回のグループワークがきっかけで、学生が抱えている思春期特有の問題が早めに表面化し、担任も早めに対応することができた。このような活動を通して、学生たちは目に見えない部分で学び成長している。そのため、今回のグループワークは、学生にとっても担任にとっても大切な経験だったと思う。

３．４　クラス４のケース

クラス４は、上記３つのクラスの活動をクラス担任教員が察してグループ討論会を企画し、特別活動の２コマを利用して、 以下の形で実施した。

１）当時の座席配置に従い、1 班 6 人の構成で 7 班にグループ分けを行った。また、 議事進行，議事進行補佐，書記，書記補佐，発表者２名と１人１役の形で割り振った。
２）本校の教育理念にある「優れた人格」を育むために高専在学中に経験したいこと、というテーマで班毎に議論を行った。また、以下の視点で議論をするように指示した。

i)　「優れた人格」を育むために高専在学中に経験したい具体例の提示
ii)　i）で挙げたことを経験したいと思う理由のできるだけ具体的な提示
iii)　「優れた人格」を育むために良いきっかけになると思われる学内行事、なければ新たな提案
iv)　iii）で挙げたことを経験したいと思う理由のできるだけ具体的な提示

3）2）で挙げた4点に関してグループ毎に2名の発表者が発表した。また、発表グループ以外の6 つの班は発表班の発表に関し2）－i)～iv)の項目を5段階評価（5が最高の評価）するように指示した。ここで、評価の基準は「説得力及び斬新性があるか」という点で採点させた。

4）班毎に2）－i)～iv)の 5 段階評価の項目毎の平均を取り、その結果を後日、クラスに掲示した。さらに、班毎の議事録を提出させ、担任のコメントを2）－i)～iv)の項目毎にコメントし、これも掲示した。

グループ討論会を企画した当初は議論と発表を 1コマの授業時間内で終らせるように企画したが、なかなか議論が進まずに特別活動の時間が2コマ必要な状況となった。結局、グループ内の議論に60分程度、発表と評価の時間を20分程度費やした。グループ討論会での総合評価は最終的には以下のようになった（表2)。

表 2.　グループ討論の総合評価

班／項目	1班評価	2班評価	3班評価	4班評価	5班評価	6班評価	7班評価
2-i)	3.4	4.0	3.4	3.7	3.9	3.7	3.7
2-ii)	3.7	4.0	3.4	3.5	3.9	4.0	3.2
2-iii)	3.2	3.7	3.5	3.7	3.9	3.5	3.5
2-iv)	3.5	3.5	3.5	3.7	3.9	3.4	3.4
平均	3.45	3.80	3.45	3.65	3.90	3.65	3.45

3.4.1　クラス4の支援者の感想

他の3つのクラスが本校のカウンセラーの指導下でグループ学習を行っている話を担任会の報告で知るに至った。その報告では、そのグループ学習において学生個々人の情緒に働きかけるきっかけを与え、あとはグループ学習を通して、個々人の情緒の成長を促す活動であるという感想を持った。しかし、詳しい報告を聞くとグループ学習自体「諸刃の剣」の側面を本質的に有しているように感じた。実際、クラス全体には目に見えてよい兆しが現れる一方、情緒の成長が年齢相応の発達段階にないと思われる学生には、強すぎる影響を与えたようにも見えた。

しかし、クラス4の担任教員は他クラスとの足並みをそろえる必要性はあるものと判断し「グループ学習的（＝似て非なるもの）な活動」を実施することとした。このように判断するに至ったのは、グループ学習自体「諸刃の剣」の側面を本質的に有している点が否定できず、担任一人で学生の情緒に一石を投じてみるのは責任が持てないと判断した結果である。このように判断せざる負えないほどグループ学習の効果は絶大であることは否定できないという感想を持った。

そこで、グループ学習が意図している直接的に情緒を刺激することで自己の情緒的な成長を促すことを目標とする手法は取らず、意識下から自己の探索を試みることで、自分を間接的に見つめてもらうことを目指した。この目標を達成するためにグループ討論会という方法を取り、「自分がステップ・アップするために必要なこと」を考えてもらう作業を課すことで自己の探索を試みてもらうことを企画した。但し、この意図は学生には伏せた形で実施している。

この目的を達するためにクラス4の結果において記した 1)-4)を実施した。この結果、身近なところから自分が目指しているものを考えることにより、自分自身を探索し、それをグループ内で話すことにより自己表現することを課すことで「グループ学習」で期待される効果がこの取り組みでも現れてくるか否かをクラス担任教員は注意深く見守った。

結論からいえば、他のクラスに現れたような劇的な変化の有無は実施直後には判断できなかった。しかし、次のことが取り組み中に見て取れた。

グループ討論会のグループ間での総合評価の結果は表2より，5班が平均点的には3.9 点という状況であり、一歩抜け出している。内容も「目からウロコ」的な意見であり、発表中においてもクラス全体に衝撃が走った。内容はクラス4の結果で記した2-iii）の問題提起に対して、5 班の意見は「それが学校行事であってはならない。」であった。

ディベートにおいて、問題の根幹を否定してしまっては議論の取り付く島がなくなってしまう、という点においてこの意見はルール違反と捉えることもできる。しかし気になった点は、これを意見した 5班には、文化祭でクラスの出し物を積極的に牽引した2名の学生が含まれていることに意外な一面を見た気がした。後日、本校カウンセラーの鈴木にこのことを話したとき、「文化祭でクラスの出し物を積極的に牽引した学生ならではの正常な反応です。」という話を伺い、担任としてある意味で謎が解けたと

感じた。さらに、クラス内討論会を実施したときは、この影響の有無の判断ができなかったものの、クラス内討論会をやっただけの影響があったことを鈴木のコメントから感じ取るに至った。

３．５　総合的考察

グループワークの意義として、福島(2007)によれば[1)]、若者は安全なグループの場では、1 対 1 のカウンセリング等では見せない、自然な形でのコミュニケーションや行動パターンを示すこと。そして、若者はグループの中で似たような課題や悩みを抱えているのが自分一人ではないことに気づき、仲間意識を持ち、仲間に受け入れられる経験を経て、自己評価を高め、自分自身を受け止められるようになることを挙げている。今回の 4 クラスの事例においても、通常の教科授業とは違う雰囲気の中で、クラスの仲間の意見や感じたことを聞き、異質な部分も感じながら、クラスの仲間としての自分を体験することができたようである。

高専の学生は、16 歳から 20 歳までの 5 年間を、その後の人生に大きく関わる工学の専門教育を受けながら成長していく。その就学期間は思春期から青年期にかけて重なっており、エリクソンがとなえるアイデンティティ（自我同一性）の確立などの発達課題を解決する事の教育的方策は検討すべきことであるが、特殊な学業制度であるため、ほとんど検討されていない。さらにクラス担任の経験的・主観的判断ではあるが，本校の場合は工学の技術に特化した専門教育を受けていく自覚・心構えができている 1 年生は少ない状況がある。自己を強化させる場（仲間に受け入れられたり、認められる場）として、高専 5 年間のクラスの仲間関係が“異質の協力”を感じながら機能する導入的方策として、1 年生でのグループワークの活用が期待されると考えた。

今回は16歳の高専1年生の事例をもとグループワークの効果を主観的に検討したが、今後は何らかの心理学的アンケートなどを用いて、自尊心や自信の感情などの精神・心理的尺度を用いた検討も必要であろう。

そして、クラス 4 についてはディベートでの意見交換であったが、他者の主張・意見を知ることで、グループワーク的な効果は得られたと考えられる。学生・クラスの状況にあった、グループでの意見交換の方法をクラス担任が主体的に提供できることは良いことであると考えた。

３．６　高専方式グループワークの提案

高専では文部科学省のキャリア教育[2)]の導入により、職業観や勤労観を育てる教育が行なわれている。そのキャリア発達の 4 大能力の一つとして、人間関係形成能力がある。高専は、さまざまな中学校を卒業した学生が入学してクラスを形成している。しかしながら、レポート作成や進級の際には留年があるなど、学業において仲間が助け合って乗り越えていかねばならない困難や課題は多いと考えられる。そこで、キャリア教育の導入部分として、キャリア教育に人間教育の側面を盛り込んでいく意味合いでも、グループワークによるクラスの仲間づくりの活動は有効ではなかろうか。

あるいは、保健体育の保健分野の一単元である「自己実現」での授業の発展的取り組みとして導入することも有効であると考えた。学生の思春期後期の精神衛生を教科として扱い、検討することも今後必要であろう。

そして、本事例を元にした実際の授業展開としては、1 回目を本報告の方法に示した絵本を用いた自分の感情を表現するトレーニングとする。1 回目の授業で、自分を見つめる。意識を解放する。他者をみつめる。異質の協力を知る。以上のようなことを狙いとして行なう。2 回目の授業でも絵本を用いて親子関係を見つめなおす。生い立ちを見つめなおす。性について考える機会を提供する。そして、アンケートを実施する。最後の 3 回目の授業はクラス２が行なったようなアンケートに書かれた“思い”をグループ分けし、タイトルを付ける話し合いとする。クラスの仲間としての意識が強化されると考えられ、支援者（クラス担任）自身も、全学生の意識・“思い”を確認することができる利点がある。

本報告の方法は、本校カウンセラーの鈴木が長年のカウンセリング経験をもとに考案された実施方法をもとにしている。本報告のクラス 1 のグループワークで、絵本の読み聞かせを交えて、鈴木の講演が行われたり、手紙でのメッセージを伝える手法など支援者の技量が授業の展開に大きく影響していると考えられる部分がある。しかしながら、場合によっては除外する事も考えられる。そうであっても、グループワークの効果は望めるものと考えた。支援者の技能・知識の中での柔軟な発想で、今後教育現場で実施可能な方法とプログラムを実践しながら検討する事も大切である。

４　まとめ

我々は、高専 1 年生のクラス担任として教育活動をする中で、学生の学力不振・問題行動・不適応の事例が多く発生しているように感じた。そこで、心理カウンセラーの協力のもとにグループワークを実

施した。今回用いたグループワークは、標準的には3つのプログラムを行なった。1回目は、絵本の読み聞かせを行ない、グループ内で個人の心の内に湧いた自己内面を表明し、他の人に伝える能力を支援・刺激することを目的として行なった。2 回目は、心理カウンセラーの「思春期と性について」のテーマでの講演を、“わたしはわたし”ということを引き受けることの支援を目指して行った。3回目は、「5年間の仲間達との異質の協力」を認識し合うことを目的として、改めて自己紹介をするグループ討議を行なった。各クラスでグループワークを行なった結果、我々は多感な思春期後期から青年期の5年間を共に過ごす高専の学生にとっては、“異質の協力”に気づき、仲間意識を持ち、仲間に受け入れられる経験をすることは、人生設計の上でも大変重要であると考えた。高専での人間教育としてのグループワークを用いた教育プログラムの検討は今後も続けていく価値はあると考えた。

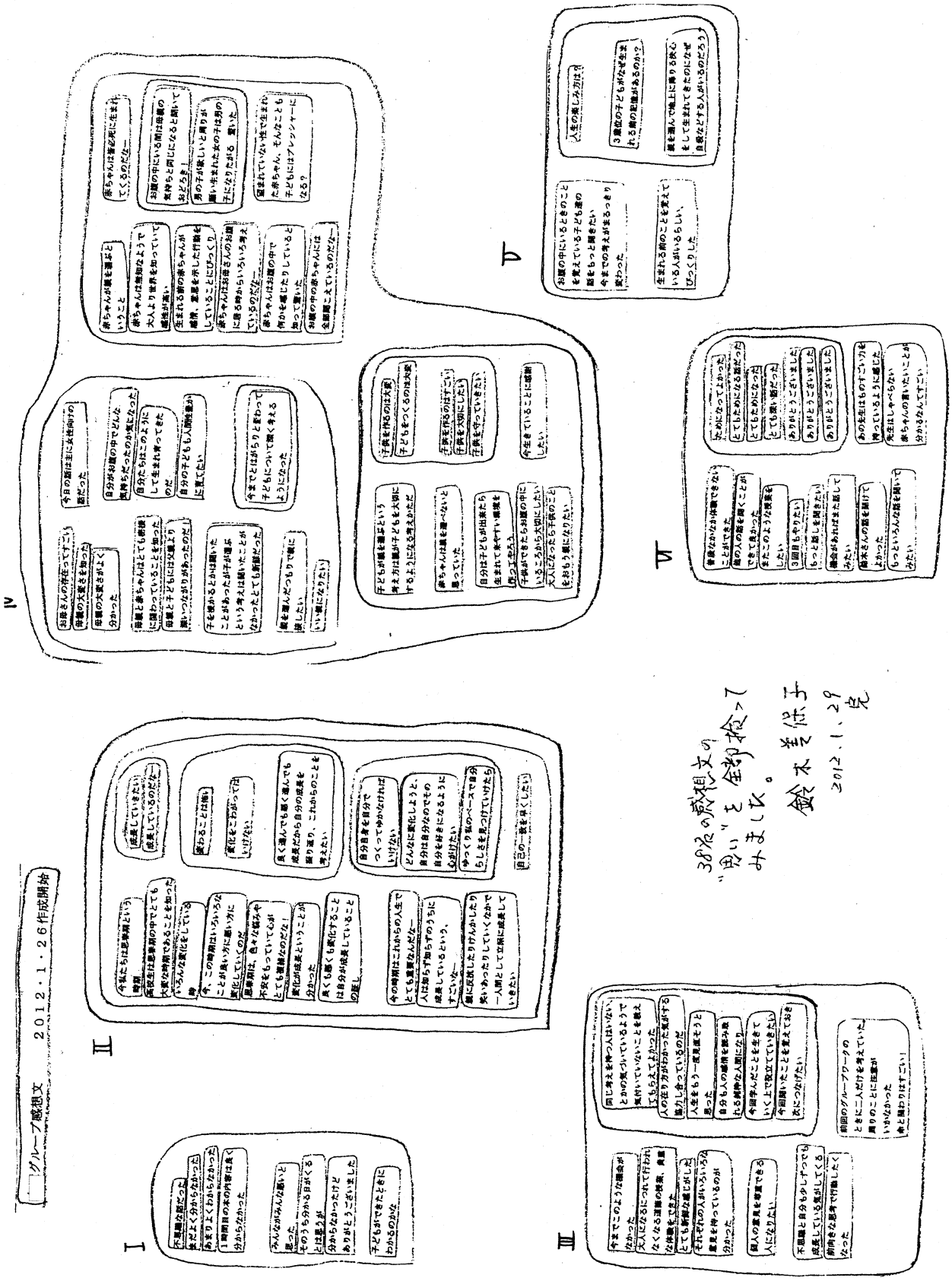
参考文献

1) 福島喜代子, 2007, ユースアドバイザー養成プログラム（改訂版），第４節グループワーク，内閣府.
2) 小学校・中学校・高等学校　キャリア教育推進の手引−児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために−, 2006, 文部科学省.

注

１）「アオさんとリンゴ」は、漫画家・絵本作家の馬場のぼる氏の作品である。性格が優しい馬のアオさんは、ぽっくりぽっくりと散歩をしていると小川で流れてきたリンゴを見つける。おいしそうなリンゴを食べたいなあと思って、アオさんはのんびりと頑張るのだが、ネコ，タヌキ，ゴリラ等の多様な登場キャラクターと関わって起こる出来事のたびに、リンゴを手に入れそうになったり、ならなかったりする。最後に手に入れた一個のリンゴも「まあいいさ。」とカラスさんのお食事になってしまう。登場キャラクターが多様で読者が共感し、様々な感情・感想をもたらさせる絵本である。

２）「私があなたを選びました」鮫島浩二著、上野ゆかり絵、主婦の友社、2001年発行。産婦人科医である著者が、お産の現場で接したお母さんたちからのさまざまな経験をもとにこの絵本は生まれた。「いのち」の強さを実感し、「産んでくれてありがとう」と心から思えるきっかけになる絵本である。産まれてくる赤ちゃんの立場での一人称で話が語られており、「私があなたを選びました」という言葉にぐっと引きつけられる絵本である。

３）「コブタの気持ちも分かってよ」小泉吉宏著、幻灯冬舎、2002年発行。子供の頃に感じたであろう事、思いがコブタの目線で大人に語られている。辛さを抱えた思春期の学生には、子供の頃から、押し込めていた感情に気づき、その感情を吐き出すきっかけとなりそうな絵本である。

資料２．”思い”のタイトル付けでの配付資料